

《日本研究所研究プロジェクト③》

アイヌ近・現代思想史の包括的研究

マーク・ウインチェスター

本研究は、科研費プロジェクト平成二六年～平成二七年「アイヌ近現代思想史の構築―近代性を軸とする歴史

者は同研究が引き続き現在進行中のものと考えており、本研究では進展させていく。

果を踏まえ、さらにそれを進化させ、完成するものとする。同研究は、下記の三点を考慮の軸として、アイヌ民族の近・現代思想史の全体像に迫ることを目標とした。①近・現代におけるアイヌ思想史の系譜構築の必要性、②アイヌ近・現代思想史の日本思想史研究上の意義、③世界規模の社会的かつ歴史的、または哲学的な思想課題としてのアイヌ近・現代思想史。同研究の当初の目的であったアイヌ近・現代思想史をめぐる一冊分の本の出版までには至らなかった。したがって、研究代表

本研究では、拙著論文「人間と呼ばれるものへの抗排であるように」―佐々木昌雄とアイヌ近・現代思想史における贖いの政治」の続編でもあり、準備中の論文「『あとは人間の問題としなければならぬ』―平村芳美と世界先住民族運動模索期における反差別精神」を完成し、引き続き近・現代におけるアイヌ思想史の系譜構築のために、なるべく多種多様な文脈において活躍していたアイヌの著作の基礎的整備と再検討作業を中心に研究を進めていく。上記の準備中の論文の中心人物である土橋（旧姓平村）芳美氏は二〇

一七年三月に『痛みのペンリウク―囚われのアイヌ遺骨』（草風館）という本を緊急出版し、およそ三〇年ぶりに執筆活動を再開している。社会問題化したアイヌ遺骨返還問題におけるこの著作の意義、かつての土橋氏の活動との関係やその位置づけなどについて検討していく予定である。なお、アイヌの第二次世界大戦の戦時体験の証言者の著作をまとめて検討する作業を行い、アイヌ近・現代思想史における究極な近代経験としての戦争体験の持つ意味を模索する論文、一九九〇年代以降のアイヌの歴史をめぐる歴史修正主義の旗振り役を務めた文化人類学者の河野本道についての論文も現在準備中である。本紀要に、「分類学者・河野本道のアイヌ民族否定論（上）」をその第一部として寄稿している。これらを含めて、本研究では、アイヌ近・現代思想史をめぐる一冊の著作をまとめることを目標とする。